

ポエムをラブレターと勘違いしたダウナー系ヤンキー女が、ヤンデレで怖すぎて、とても勘違いだと言い出せないうちに、脳がとろける耳舐めといちやラブ性技でついつい流れされ、どんどん取り返しのつかない状況に追い込まれていく日常。

◆第1章 ヤンキーの黒木さんに、ポエムを読まれてラブレターと勘違いされたけど、余りに怖くて言い出せないまま付き合うことになってしまったが、やっぱり、勇気を出してなんとかひとこと言おうとするも、初めてのディープキスに、何も言えなくなってしまう童貞の、ある日の放課後。

『ガラガラっ』

「よお……」

「これ……」

「うん、アンタが書いたやつ……」

「うん」

「…………読ませてもらつたよ…………」

「こんな手紙、貰つた事なかつたから…………ふふつ…………最初はなにかと思つたよw」

「でも、私、あんな…………ロマンチックなこと言われたこと無いから…………嬉しかつたよ」

「私も、口下手だから、上手に喋れる人……すごいと思うし……」

「アンタ、すごいよ」

「テレビとかで、流れてる、人気の歌とかみたいだった」

「うん……」

「だから……」

「オッケー……だよ……付き合うの……」

「だから……彼女になつてもいいって事だよ」

「ふふ……」

「……」

「…………私の、笑った顔が見たいって書いてただろ？」

「だから……笑つてみた」

「……変だつたかな？」

「ちょっと頑張つたけど……」

「でも、無理やりじゃないぞ」

「ホントに、ちょっと楽しいんだ……今」

「今まで、あんまり恋愛とか、上手くいったことが無かつたから……」

「もう恋愛とかしなくていいかなって思つてたんだけど」

「アンタみたいな人なら、上手くいくかもしれないって思うよ」

「ん？　なに？」

「聞いてほしいこと……？」

「なに？　また、喜ばせてくれるのか？」

「あ……ちょっと待つて」

「その前に一つ、いいか？」

「ん……」

「私…………裏切りとかは、許さないから……」

「…………裏切つたら、アンタを殺して、私も死ぬよ……」

「言葉のあやとかじやないよ」

「浮気とか…………裏切りは……」

「マジで殺すから…………半殺しとかじやないよ。全殺しだから……」

「…………」

「ん……」

「そうだよな……」

「あれだけ愛してるって言つてくれたんだから…………浮氣なんて、しないよな」

「ごめん……」

「実は…………気が、弱いんだよ」

「もう、アンタのことしか考えられないぐらい、心、持つてかれちやつてるから…………」

「裏切られるのが、怖くなっちゃつてるんだ」

「今まで、裏切られたこととかもあるし……」

「誰かと一緒にいたい気持ちはあるんだけど…………裏切られるのが怖くて…………」

「だから、アンタとは一生、一緒にいるつもりなんだ」

「アンタもそう言つてくれただろ?」

「一生、一緒に寄り添つていていいって……」

「なにがあつても私だけを見てるって……書いてくれたから……」

「心に……響いたよ……」

「……」

「あ……」

「で？　聞いてほしいことって何？」

「……え？　忘れちゃった？」

「そっか」

「……」

「あ…………そうだ……」

「私、男友達とか…………縁きるから」

「うん」

「携帯から、今、全部、削除するからな」

「私にはアンタだけいればいいから……」

『ピツ……』

『ピツ……』

『ピツ……』

「はい」

「できた」

「ほら…………もうこれで、携帯、誰も入ってないよ」

「あ、これは、お父さんね…………私と苗字、同じでしょ？」

「あんまり、かかるこないけどな」

「じゃあ…………次は、アンタの番…………」

「ん？」

「なに？」

「予備校の友達…………？」

「勉強するのに、なんで友達がいるの？」

「受験の情報交換…………？」

「そ、うな、んだ……」

「つ、つ…………そ、つか…………」

「私を幸せにするためにも、学歴が必要なんだな…………」

「じゃあ…………しようがないか…………」

「でも、それ以外のやつは、消せるよな」

「…………必要ないもんな」

「ん…………じゃあ、消して…………」

『ピッ…………』

『ピッ……』

『ピッ……』

『ピッ……』

「……」

「ん……消えるな」

「良かった」

「ん？」

「何が良かったかって……」

「いや……渋ってたからさ……」

「さつそく浮氣かと思っちゃって……」

「ごめんな、疑っちゃって」

「ん、ごめん……」

「反省してるよ」

「…………殴つても、いいよ」

「悪いの、私だし……」

「え？　いいのか？」

「やさしいんだな……」

「…………ん、わかった……」

「信じるよ」

「本当に、信じる……」

『ガタつ』

「え？」

「これ……」

「これは、トンカチだよ」

「え？」

「なんで捨てたかって……」

「そりや……いらないと思ったから、捨てたんだけど……」

「変なこと、聞くんだな」

「…………どうしたの？」

「…………え…………これ、燃えないゴミじゃないのか？」

「プラじやないから、ダメなんだ……」

「そつか……」

「うん。わかった。じゃあここに捨てるのはやめるよ」

「なんか……いいな、こうやって、間違いを正してくれる人が身近にいるってさ」

「正しさを教えてくれる人がいるって、いいよな」

『ガサガサ……』

「え？」

「私の変わりに、ゴミ箱から拾ってくれるのか？ 処分も、しといてくれるの？」

「…………もしかして……私が、汚れないために？」

「つ…………つ…………」

「嬉しい…………」

『ぎゅうううう』

「好き…………」

「私、もうアンタのこと、好きすぎてヤバいみたい…………」

「このまま、もう離れたくない」

『ぎゅうううう』

「駄目、離さない…………」

「え…………？」

「予備校…………？」

「このあと？」

「……………そうなんだ…………」

「悲しいな…………離れるのは」

「うん…………」

「二人の幸せのためだもんな」

「仕方……ないよな……」

「じゃあ、少しの間…………我慢するよ」

『さう』

「ん…………」

「勉強、がんばって……」

「あ……」

「どうで待つてればいい?」

「え?」

「いや…………」

「予備校のあと、会う場所だよ」

「決めとかないと会えないだろ?」

「え? なんで決めないの?」

「…………あ……」

「そつか…………」

「そうだよな…………スマホがあるもんな」

「私、ほら、あんまり待ち合わせとかしないからさ」

「でつきり、待ち合わせしなかつたら…会えなくなっちゃうかと思つて……」

「え? 話をきくのか? なに? さつきの、思いだしたの?」

「うん……なんだろ……」

「ああ……」

「あ、 そのまえに……」

『ちゅつ……』

「ん……」

「ふつうキス、 するだろ?..」

「恋人なんだから……」

「めっと、 しょ……」

『ちゅぱつ……』

『ちゅぱつ……』

「もつと……舌、 出して……」

『ちゅぱつ……ちゅつ……』

『れろ、 えろ……』

『ちゅぴ……』

「(はあ……はあ……)」

「ん?」

「なんで急にって……だつて……したくなつちゃつたから……」

「あ……」

「話つて、なに?」

「え?」

「また忘れちゃったのか?」

「そつか.....」

「.....うん」

「行つてらっしゃい」

「何時間も、離れるの.....寂しいけど、我慢するよ」

「頑張つて.....」

◆第2章 無断でサムターン回しで鍵をあけ、押しかけ女房してきた黒木さんに、食後、勇気をだしてハッキリひとこと、言おうとするも、黒木さん的には恋人ならあたりまえの、恋人ご奉仕セックスがはじまり、何も言えずに耳元でエッチな言葉を言われ続けて射精するある日の、夜。

『ガチャ』

「あ、おかえりー……」

「ん？」

「何って？」

「あ……これ？」

「これは…………お味噌汁だよ」

「すぐ作っちゃうから、待つてて」

「え？」

「いや…………スマホに連絡が無かつたから、忙しいかと思って、家で待つてたんだけど……」

「…………だって、待ち合わせも決めてなかつたし……」

「鍵？」

「うん…………貰い忘れてたから、あけたよ」

「え？　どうやつてつて……？」

「鍵の開け方とか、興味あるのか？」

「なんで？　ダメだぞ？　犯罪に使つたら……」

「ん？」

「なに？ 改まって……」

「話？」

「え？ 包丁？」

「置くのか？ 持ったまま話さないでほしいの？」

「なんで？」

『ひぼひぼひぼ……』

「あつ……ごめん、火、とめないと……」

「ちょっとソファに座って待つてて」

『タタタタつ……』

……

……

……

『カチャツ……コトつ……』

「ふふ……」

「美味しかった？」

「そつか……良かつた」

「え？」

「そろそろ……？」

「…………あ、ごめん…………」

「私…………気づかなくて…………」

「うん…………そ、うだよね…………」

「いつのまにか、もう結構な時間になっちゃって…………」

「じゃあ……」

『しゅる…………』

『しゅる…………パサつ』

「ん？ なにって…………」

「そろそろって言つたのは、アンタだろ？」

「ちゃんと、床の準備もしてあるし…………」

「するつていつたら、セックスだろ？」

「どうした？」

「何か、他にすることあるのか？」

「あ……」

「なるほど…………」

「うん。そうだな」

「私が間違つてたよ」

「確かに、まずは、歯磨きからだな……」

「ん？」

「ふふ……目のやり場に困るか？」

「勝負下着なんだ、これ……」

「ちゃんと、シコい…かな？」

「こういうの、好きかなと思って……」

「……そつか……良かつた」

「喜んでくれたなら、嬉しいよ」

「……じゃあ、一緒に、歯磨きしてから、寝床に行こう」

「ふふ……」

「今夜は、いっぱい可愛いがってくれよ」

……

……

……

『しゃーーーー』

『キュッ……』

『シャカシャカシャカシャカ……』

……

……

……

「さて……」

「やろうか」

「ん」

「ほら……口あけて……」

「キスだよ」

「それとも、舌で、こじあけてほしいのか……？」

「なんだ……」

「もしかして……アンタ、童貞なのか？」

「そ、そうなんだ……」

「じゃあ、私が最初の女で……」

「そして、最後の女になるわけだな……」

「ふふ……」

「それは、嬉しいな」

「ん……」

「まずはキスからするからな」

「口開けて……」

「少し、舌、だして……」

「そう……」

『ちゅうつ……』

『れろつ……れろ……』

『じゅぶつ……』

「(はあ……はあ……)」

「ん……」

『ちゅうつ……』

『れろつ……れろ……』

『じゅぶつ……』

「ふふ……」

「ん?」

「情熱^{セイセキ}的だな…」

「私の事が、それほど好きなんだな」

「ん?」

「どうした? 緊張してるのか?」

「そつか……」

「…………大丈夫」

「私に任せて……」

「エッチなこと、いっぱい言つてあげるから……」

「そしたら、すぐエッチな気分になるぞ……」

「耳元で、言つてあげる……」

「ん……」

「乳首、好きだろ？」

「乳首……触りながら、エッチな言葉、言つてあげるからな」

『ふううううう』

『あむうつ……れろれろ……くちゅつ……びちゅつ……』

「いまからあ……」

「なにするか、よく、かんがえて……」

「私と、何するのか……よく、思いだして……」

「アンタの……」

「その逞しい暴れん棒で……」

「私の、濡れ濡れおマンコに……突いたりい……引いたりいたり……引いたり……突いたりい……引いたり……引いたりしてえ……」

「腰をへこへこ、へこへこしてえ」

「二人で、猿みたに……パコりまくつて一緒に、気持ちイイになつてえ……」

「アンタの精子タンクから、私のおまんこに、白くてえ……エッチな赤ちゃんのもとを……」

「ぴゅうううううううううつつって……」

「私に種付けするんだよ……」

「ん……」

『ふうううううう』

『ああむうつ…………びちゅううつ…………』

「もつともつと……チンポきもちいいになるためにい……」

「キスとかしたり……」

「私のおっぱいとか、触つたり……揉んだりとかして……」

「もつともつと、チンポきもちいいになるんだよ……」

「私の……Fカップのおっぱいに……」

「おちんちん挟んだりとかして……私の事、エツチなおとのオモチャにして、チンポきもちいいにしていいんだよ」

「私は、アンタ専用の、大人のオモチャなんだから……」

「いっぱいチンポきもちいいになつてくると、タマキンがフル稼働して、どんどん精子作つて……」

「精子タンクに精子ためてえ……」

「最後に……その、タプタップのタマキン……空っぽになるまで、私にザーメン出す遊びしていいんだよ……」

「腰、へこへこお、へこへこおして……」

「最後に私に向かって……」

「おちんちんの先から、ぴゅうぴゅううつって……」

「好き放題……私の身体にかけたり……中に出したりして、汚しちやつていいんだよ」

「私の身体は……アンタのエッチな大人のオモチャになるために、Fカップなんだから……」

「ね……」

『ふうううううう……』

『ああむうつ……ちゅつ……ぴちゅつ……』

「ちくび、きもちいいだろ……?」

「ふふ……」

「エッチするときも、ずっと乳首、いじつててやるからな……」

「そしたら、いつもより、いっぱい精子でるから……気持ちイイぞお……」

「すつつごい、いいの出るから……」

「白くて、エッチなザーメンが、どつぴゅううううつて……残り汁も……ぴゅるぴゅるうううつて……」

「イイの出るぞお……」

「私も、そしたら、気持ち良くなっちゃって……逝く逝くうううつて……」

「アンタにしがみついちゃうだらうなあ……」

「だつて……大好きなアンタに、種付けセックスされてるんだもん……」

「そりや、私だつて、ただじやいられないよ……」

「逝く逝くうつて……天国逝く寸前になっちゃって、キスとか、求めちゃうだべうなあ……」

…」

「逝くとき……キスしながら逝くと……すつゞいんだから……」

「口も、おマンコと、おちんちんも、繫がっちゃって……」

「全部が、溶けて、すつごいアクメで、ビクンビクンってなるんだぞ……」

「子宮とかも降りて来ちゃって……」

「遺伝子の受け渡しが成功しちゃうんだ……」

『ふううううう』

『ああむうつ……れろれろ……ぴちゅつ……』

「今から私と、すること……」

「わかつた……？」

「なあ……」

『ぎゅうううう』

「ふふ……」

「おひきくなつてゐる…………」

「すつゞく、かたい……♡」

「私と何するか……わかつたみたいだな……」

『バサつ……』

『しゅ…………しゅつ…………』

「ふふ…………」

「かあわいい…………」

「いっぱい、声だしていいからな…………」

「我慢しないで…………いっぱい喘いだほうが、声と一緒に白いのも……いいの出るから…
…」

「あ…………」

「でも…………まだ逝つたらダメだぞ…………」

「逝くときは…………ちゃんと私の中で逝くんだからな…………」

「私の身体で、いっぱい気持ち良くなつて…………最後はしつかり種付けしないとな…………」

「男なら、キッチリまずは、男らしく白くてたくましいザーメンで……」

「私に、マーキングしてくれ…………」

「どっぷり、たっぷり…………エグいのを流し込んで…………」

「な…………」

「ん…………」

「口、あけて…………」

『ちゅふ…………ちゅぱ…………』

「ふふ…………」

「もう、ちょっとキスがこなれてきたな…………」

「上手だぞ……」

「気持ち良かつた……」

「ふふ……」

「じゃあ…………そろそろ、挿れよつか…………」

『がさう…………がさう…………』

「ん、つ……」

「そ、そりう……」

「そのまま、奥につぐつぐつて……」

「んお ‘…………お ‘…………」

「ふお ‘…………お ‘…………」

「あ ‘…………あ ‘…………あ ‘…………あ ‘…………あ ‘…………」

「入つ…………つたつ…………あ ‘…………あ ‘…………」

「お ‘…………」

「ん ‘…………」

「(はあ…………はあ…………はあ…………)」

「いいぞう…………」

「好きなようにう…………」

「気持ち良くなるように…………私のおマンコで、おちんぽしじいひてう…………」

「ん、つ……」

「あ、つ……あ、つ……」

「あ、つ、あつ、あつ……あ、つ……あ、つ……あ、つ……あ、つ……あ、つ……」

「ん、つ……あ、つ……」

「氣持ちいい……」

「ん、つ……お、つおつお、つ……おつ……つほおおつ……」

「おうつ……お、つ……おおおつほお、お……」

「アンタもつ……氣持ちイイ……？」

「私の、おまんこつ……」

「ん、つ……ん、つ……」

「アンタがつ……これから一生、使う、おマンコだよつ……」

「はああ、つ……あ、つ……あ、つ……ん、つ」

「あ、つ……あつ……あ、つ……あつ……あ、つ……」

「氣持ちイイだろ……？」

「かずのこ天井なんだよつ……私の、アソコつ……」

「オナホみたいになつてるんだよ……中がつ……ん、つ……」

「絡みついてくるだろつ……おちんぽにつ……」

「ん、ん、つ……」

「珍しいらしいぞ……」

「すごく、気持ちイイんだって……」

「あつ……はつ、ん、“つ」

「これから一生、好きな時に使つていいんだぞつ……」

「たまつたら、すぐ使つていいんだからな、毎日つ……いつでもつ……」

「もちろん……」

「このおっぱいも……」

「全部つ……」

「アンタの……大人のおもちゃだから……」

「あ、‘つ……はつ……あ、‘つ……」

「くせになつちやつて、いいんだからなつ……」

「これからつ……毎日つ……」

「毎日、やろうなつ……」

「毎日つ……毎日つ……」

「猿みたいに、パコりまくろうなつ……」

「ん、‘つ……ん、‘…」

「あ、‘つ、あ、‘つ、あ、‘つ、あ、‘つ、あ、‘つ、あ、‘つ……」

「つ、つ、‘つ、つ、つ、つ……」

「あ
……」

私
つ
・
・
・
・

きちやうつ、かもつ……アクメつ……

「んおづ…」

「おう……おう……」

「ほおつ……おつ……つほお、おおつ……」

「ダメつ……くるつ……すごいのつ……おちやうづ…」

「アンタの、腰へこつ……激しいからつ……」

「んぐつ……」

「おほつ……おつ

「うう……うぐう……う……」

「……いつちやうづ……」

「あ、あなたも……？」

「あんたも、逝きそうなのかつ……？」

「ん
…」

「じゃあ……」

「一緒に、逝こつ……なつ♥」

ん
つ
ん
」

「ひう、つ……う、つう、」

「あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ、あ、つ……」

「アグメつ……ぎぢやう、う、」

「アグメつ……」

「ぐる、」

「あふつ……」

「あ……」

「ひあ、ああああああああああつつ……」

「いつくつ、う、う、うつつ、う、う、う、う……」

「つつ～～～つつ～～～」

「んお、つ……」

「お、つ……お、つ……お、う、」

「お、つ……お、つ……ほつつお、おおお、お、お、お……」

「効つつつ、ぐ、う、ううううつ……」

「きほちいいいつ……いいつ……」

「あ、くえええ……あ、あ……」

「へあ、ああ……」

「つ、」

「(はあ…………はあ…………はあ…………はあ…………)」

「(ひ…………きいもぢ、よかつた……)」

「アヘ逝きしちやつた……♡」

「ゑゑ……」

「アンタはどうだつた?」

「そ、う…………」

「良かつた…………」

「(はあ…………はあ…………はあ…………はあ…………)」

『くつちゅ…………』

「あ…………」

「チンポ抜いたら…………いっぱい精子出でかたぞ」

「ゑゑ……」

「す、ぐ量だな…………」

「健康優良男児なんだな…………」

「ホントに、すごい量つ…………孕ませる気、まんまんつて感じだな」

「馬並み、つていうのかな…………?」

「(こ)んなので毎日出されてたら、すぐ孕んじやうだらうな♡」

「あ…………」

「お風呂、どうする?」

「入るなら、沸かすけど…………」

「明日の朝にする?」

「ん? 私は、明日の朝にしようかな…………」

「え? 制服とかは、持ってきてるから、大丈夫だぞ」

「鞄もあるし」

「だから、帰らないぞ」

「ん……一緒に、学校に行けるぞ」

「どうした?」

「そうか……」

「ん……? なんでもないのか?」

「……もつと、ひつついでいいか?」

「ん……私は、もつとくついて寝たいぞ」

「ん……ふふ……」

「幸せだな」

「…………おやすみ……」

◆第3章 無断で自分の両親と交友を深めている黒木さんに、休み時間、今度こそハツキリひとこと言おうとするも、人気のない所に連れ込んだ理由を勘違いされ、恋人の責務として始まる耳舐めからの、耳元好き好き連呼手コキの性欲処理アタックに、結局、いつのまにか何も言えなくなる、ある日の、休み時間。

『ガチャヤ……』

「今日も、いい天気だな……」

……」

「バタンツ」

「一緒に登校できるから、毎日、登校も楽しみだな」

「え？」

「家？」
いや、別に、帰らなくても大丈夫だぞ」

「言つてあるし」

「うん……」

「あ……ちょっと、待つて」

「び
つ」

「はい、もしもし……」

「はい…」

「は
い
」

「あ、はい……今から学校に行くところです」

「はい」

「大丈夫ですよ」

「あ、みかんおいしかったですか！？」

「嬉しいです」

「はい、田舎から送つてくるのが余つてて……」

「はい」

「はい……また、電話します」

『ひつ……』

「ふう……」

「え？」

「ああ……」

「今のは、アンタのお母さんだぞ」「ん？」

「いや…………アンタが予備校行つてゐる間に、挨拶に行つたんだ」

「結婚を前提にお付き合いさせていただいているつて……」

「うん」

「昨日だぞ」

「どうした？」

「あ……」

「孫の顔がどうこう言つてたから……子作りには、ちゃんと励みますって一応……」

「え？ なに？」

「話……？」

「うん……いや……でも……そろそろ急がないと遅刻じゃないか？」

「話は、また後でだな」

「昼休みにでも……な」

……

……

……

『キーンコーンカーンコーン…………キーンコーンカーンコーン…………』

『ぎいいい……』

『バタン』

「どうした？ 昼休みになるなり…………こんな、そこに連れ込んで…………」

「ふふ……」

「魂胆は、わかつたぞ」

「もう、我慢できなくなっちゃったんだろ？」

「昨日も、あんなにいっぱいパコったのに…………」

「すごい性欲だな」

「ふふつ……」

「恥ずかしがらなくてもいいだろ……スケベなのは、いいことだ」

「私は、好きだぞ……スケベな、アンタが……」

「違わないだろ……」

「スケベだろ、アンタは……」

「おちんぽミルクを、ぴゅううつしてしたくて、私を連れ込んだんだろう？」

「ふふ……」

「でも、さすがに学校で、パコるのは危ないからな……」

「家に帰つたら、また好きなだけパコつていいから……」

「今は、手で我慢してくれ」

「ほら……壁に、もたれて……」

「耳、舐めながら……手でしてあげるから……」

「ん……」

『ふうううう』

『れろれろ……くちゅつ……ぴちゅつ……』

「ふふ……」

「気持ちいいか？」

「舌使いのテクニックは、良い妻のたしなみだろ？」

「アンタの、良い妻になりたいからな……」

「でも、ガッコでは、声は、我慢しろよ……」

『カチヤ……かちや……』

『じじじ……』

『ガサガサ……………パサつ……』

「ふふつ……」

「学校なのに、こんなにしちゃって……」

「スケベだなあ……」

「私の夫は、とつてもスケベだ……」

『しゅつ…………しゅこつ…………』

『しゅつ…………しゅこつ…………』

「ん？ なんだ？」

「どうした？」

「話があるのか？」

「じゃあ、一回、やめるか？」

「…………ん」

「そ、うか……やめないんだな」

「わかった」

「じゃあ、いくぞ」

『れろ……れろ……くちゅつ……くちゅつ……ぴちゅつ……』

「んっ……きもちいいだろ……？」

「つばも、垂らして、すべりを良くしておこう……」

『ペッ……』

『ん……ペッ……ん……ペッ……』

「これぐらいで、いいかな……」

『じゅぶっ……じゅぶ……』

「ほらっ……すべりが良くなつた……」

「皮でやるより、直接、カリ首じゅぼじゅぼしたほうが、気持ちイイだろ?」

「ふふ……」

「耳もか?」

「わかつた、わかつた……」

「いくぞお……」

『れろれろ……くちゅつ……ぴちゅつ……れろれろ……』

「じゃあ……」

「持ち替えて……」

「反対も……」

『れろれろ…………くちゅつ…………ぴちゅつ…………ああむうつ…………』

「ふふ……」

「つばめ足しとくか?』

『べつ……』

『ん……べつ……ん……べつ……』

「ん………べつ……」

「すべりが、だいぶ良くなつたな……」

「尿道周りとかも、カリ首と一緒にごじごじしてあげるからな……」

「氣持ちイイだろ……尿道周り……」

「ほらっ……動くなつて……」

「我慢しろよ……」

「男だろ……?」

「そうだつ……しゃんとしろ……」

「私のこと、つかんでいいからな……」

「がんばれつ……」

「歯をくいしばつて……」

「そうつ……」

「ん……できるじゃないか……」

「かつこいいぞ……」

「男らしい……」

「素敵な夫だ……」

「じゃあ、また、いくぞ……」

『んつ……ああむう……れろれろ……くちゅつ……ぴちゅつ……れろれろれろ……』

『ふううううううう……』

『ああむつ……れろれろ……くちゅつ……ぴちゅつ……れろれろれろ……』

「はあああ……」

「だいぶ、仕上がつて來たな……」

「そろそろ逝きそうか?」

「おちんぽミルク……あんまりまき散らすと、掃除が大変だからな……」

「逝くときは言つてくれ」

「私が、手で抑えるからな」

「……大丈夫……言える」

「アンタなら、言えるよ……」

「逝く前に、ちゃんと言えるよ……」

「大丈夫だ……」

「男だろ？」

「じきるよ」

「アンタは……できる男だよ」

「逝く前に、言える……」

「愛してるぞ……」

「ん？」

「なに？」

「今の……？」

「もつと言つてほしいのか？」

「ああ……『愛してる』が、効いたのか？」

「そつか……」

「わかつた……」

「あいしてる……あいしてるぞ……すづく、愛してる……」

「死ぬほど、愛してる……、いつだって愛してる……」

「ちょお愛してる……めっちゃ愛してる……愛してる……」

「好きつ……」

「好き好きつ……」

「大好きつ……」

「好きつ……好きな人の、おちんぽにご奉仕できて、幸せつ……」

「好きな人の、おちんぽご奉仕……毎日したいつ……」

「好きな人の、おちんぽに、おててと、口と、おまんこで、ご奉仕したいつ……」

「おっぱいでも、ごほうししたいつ……」

「好きつ……愛してるつ……すきつ……」

「好き好き好き好き好き好き好き好き……」

「だあいすき……」

『ああむううつ……ちゅううつ……れろれろ……くちゅつ……ぴちゅつ……』

「んつ……」

「わかつた……」

「つつ……あつ……あつつ……」

「すごいな……」

「ザーメン……すごい勢いで出たなつ……」

「しかも、この量……」

「馬並みだな……」

「こんなの、手で抑えてなかつたら、大変だつたぞ……」

「ふふ……」

「なんだ、ボケた顔しちゃって……」

「でも……ちゃんと、逝く前に、言えたじやないか……」

「偉いな……」

「偉いぞ……」

「精子がついてないほうの手で、撫でてやる」

「えらい、えらい……」

「ふふ……」

「ん……」

「でも、そろそろ休み時間も終わるから、戻らないとな」

「ふふ……」

「また、家に帰ったら、いっぱい、やればいいだろ」

「家だったら、おまんこも使えるし……口とか、おっぱいも使って、いっぱい気持ち良くなれるぞ」

「楽しみだな」

「授業が終わったら、早く、帰って、いっぱいエッチなことして遊ぼうな」

「……ふふ」

「じゃあ……教室に戻ろう……」

◆第4章 無断で住所を移転してきて同居を始めてしまった黒木さんに、さすがに、ひとこと言おうとするも、運び込まれた荷物の中にあったマットプレイ用のマットとローションで、ソープランドプレイをしてもらうことになり、そのままオホ声セックスに突入。かずのこ天井の黒木さんのアソコにガツツリ種付けセックスをして、結局なにも言えなかつた、ある休日の昼。

『ぴんぱーん』

「はあい」

『ガチャ』

「あ、はい」

「ありがとうございます」

『バタン』

「ん？」

「どうした？」

「え？ これ？」

「通販で買ったのが、届いたんだ」

「え？ 住所？」

「ああ……私も一人暮らしだったから、そつちはもう、引き払つたぞ」

「うん」

「もともとあまり、物は持たないタイプだから」

「身軽なんだ」

「ん？ なんだ？」

「話？」

「わかった……なんだろうな」

「あ、その前に、これだけ、開けてもいいか？」

「段ボールとかは、なるべくすぐ片づけてしまいたいんだ」

「ん……」

『ガつ…………』

「ふふ……」

「ん？」

「これか？」

「これは…………マットだぞ」

「ほら、アンタ、最近、風俗ものが好きだろ？ だから……」

「え？」

「アンタの持ってるAVだよ」

「最近、風俗ものが…」

「え……？ いや……アンタのパソコンに入ってるだろ？」

「私がいないとき、一人で見てるやつだよ」

「最近、風俗もののAVで、センズリこいてるだろ？」

「何回でもシコれる、とかいって……」

「パスワード？」

「ああ…………まあ、それは指の動きを見ればわかるから……」

「ん？ 指の動きは、カメラに写ってるぞ」

「カメラは、ほら、そこと……あとは、その火災報知器の中とか……」

「あとは……」

「え？」

「いや…………そりや、撮るだろ」

「アンタの顔は、いつでも見てたいだろ」

「…………なに？ 言いたいこと？」

「ああ……」

「もしかして……」

『ガサガサつ…………』

「これ、か？」

「大丈夫、ほら…………ちゃんと動画にも出て来たローションも買っておいたぞ」

「この上で、ローションまみれになつて、とろつとろになつたところを……」

「いっぱい、淫語を耳元でいいながら……攻めてあげるからな」

「ヌルヌルにしたら、きっとマスターべよりずっと、気持ちイイぞ……」

「ぜったい、いつもよりいいのがいっぱい出るぞ……」

「ふふ……」

「どうする？ もうそくやるか？」

「そうか……じゃあ、準備するな……」

「ふふ……」

「楽しみだな……」

……

……

……

『ブピュツ……クチヨツ……チュバ……』

「ふふ……」

「もう全身、トロットロだな……」

「ビニールのマットどう？」

「イイ感じ……？」

「エモいか？」

「ふふ……」

「そつか……良かつた……」

「じゃあ……私も……」

『ぬちゅう……』

「ああ……」

「ぬるぬるの……」

「ぽよんぽよんだな……」

『にゅぢや……』

「どうだ?」

「……私の身体……」

「ああちいいか……?..」

「ん……」

「じゃあ、うじくぐぞ……」

「AVの動きを再現するからな……」

『じゅぶつ……じゅぶつ……』

『ぴちゃつ……にゅぱつ……』

「あんつ……」

「ん……ああ……」

「これは、私も……ちょっと感じてしまうな

「すうい滑らかに滑るんだな……」

「乳首と、乳首が……こすれちやうな……」

「あ……」

「まだエッチな言葉とかも言つてないのに……」

「今日はもう、ガチガチに勃起してるんだな……」

「ふふ……」

「やつぱり、こういうの、好きなんだな……」

「ん……」

「毎日マスターべしてたもんな……」

「白目むきながらっ……必死でこいてたから……」

「見てて可愛くてな……」

「ん？」

「なんだ、恥ずかしがつて……」

「別にいいだろ、オナニーぐらい……」

「オナニーなんて、マッサージみたいなものだろ？」

「このぐらいの年齢の雄なら、逆に……毎日コいてるほうが普通だろ？」

「どんどん精子が溜まっていくのに、抜かないでいたら、クラスには……女子も沢山いるんだし……」

「気が狂つてしまふだろ？」

「それに……」

「私たちは、つがいなんだから……な？」

「だろ?」

『じゅぶつ……じゅぶつ……』

『ぴちゃつ……にゅぱつ……』

「ふふ……それにしても……」

「おっぱいが、ところてんみたいに滑るな……」

「摩擦係数がほとんど無いぞ……」

「全身が……全部、大人のオモチャになつたみたいだ……」

「こういうのも……たまには、いいな……」

「ん……」

「いや……アンタがしたければ、毎日でもいいけどな……もちろん」

「私は、アンタ専用の大人のオモチャなんだから……」

「ん……」

「あつ……んつ……」

「(はあ……はあ……はあ……)」

「やつぱり、これ……私も、きもちよくなつてしまちゃうな……」

「あんつ……あつ……あつ……」

「感じちやう……♡」

「ふふ……」

「次は、膝の裏で、アンタの、チンポを挟んで……しゃくぞ……」

『ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……』

『レロレロ……ちゅつぱ……くちゅ……』

『はあああ……』

「かわいい声だしちゃって……」

「かわいいな♡」

「いまさら、精子タンクが……私に種付けしようと目論んで、必死に精子を作ってるのかな……？」

「ふふ……」

「そろそろ……」

「挿れようか？」

「もう……」

「けつこう仕上がつてきちゃうてるだろ……？」

「このままだと……逝っちゃうんじやないか……？」

「最後は……やつぱり……」

「おまんこの中で逝きたいだろ……？」

「ん……」

「じゃあ、今日は……風俗プレイだから……」

「私が上になるぞ」

元
文
書
一
卷

「つるつる滑るなあ」

「ん……よし……」

「挿れるぞ……」

『くつちゅ…………くつちゅ…………』

「ンオつ……お うつ……」

くつちゅ
くつちゅ

卷二

「」

二〇

卷之三

氣寺ちイイつ
……

「んつ…………あつ…………あつ…………あつ…………んつ…………あつ…………んつ…………あつ…………」

「アンタも、きもちいい……？」

「この動きで、大丈夫つ……？」

「動きかた、変えてほしかつたら……言つてつ……」

「ン、つ……んつ……」

「はあ、ああ、ああああつ、つん、つ……」

「あつ……あつ……あつ……あつ……あつ……ん、つ……」

「ああああつ……幸せつ……」

「私つ……幸せだぞつ……」

「好きな人と……毎日つ……當めるの、幸せつ……」

「猿みたいに、毎日、當みまくるのつ……好きいい、いいつ……」

「はんつ……あんつ……あつ、んつ……あんつ……あんつ……」

「ひあ、ああああああつ……」

「ちよう……気持ちいいい、いいいいつ……」

「ぐりぐり腰、グラインドするのつ……とまらなあい、いいつ……」

「あああ、あああ、ああ、つ……ん、つ」

「(ふーつ……ふーつ……ふーつ……ふーつ……)」

「奥まで刺さつてるからつ……この体勢つ……」

「この状態でゼロ距離射精されたらつ……」

「妊娠確定つ……」

「残してつ……子孫つ……」

「アナタの子孫つ……私で、残してつ……」

「種付け、してつ……」

「アナタの遺伝子、私にちようだいつ…………」

「ひゅうううつて……」

どひゅうううううつって、打ち込んでえ……
〔心〕

「好きつ……」

「好きつ……好きつ……」

「大好きっ……」

「ン、う……お、う……」

「おつ、おつ……おつ……おつ……おつ……」

「ひひ~~~~~」

「あ、ひ~~~~~」

「かわい~~~~~」

「かわいやう、う……」

「アグメツ、アグメぐるう……」

「かわい、アグメツ……」

「んおつひ、お、ひ……」

「ひひ~~~~~」

「あお、お、ひひ……おお、お、ひひ……ほ、お、お、お……」

「あつひ、ひ、う、うつ……」

「……出でる、ううつ……」

「効つか、べ、う、うううつ……」

「へあ、ああ、ああ……」

「ひひひ……」

「(ひひひひ一……ひひひひ一……)」

「(ひー……ひー……ひー……ひー……)」

『じゅぱつ……』

「~~~~~か、あめぢかつたあ……」

「ふへい…………」

「精子……出てるの、わかったよ」

「ゼロ距離射精で、子宮に直接種付けされたた……」

「これは、もう、受精してしまつてるかもな……」

「ふふふ…………」

「幸せだな……」

「ふふふ…………」

◆第5章 エピローグ。差し出された記入済み婚姻届。

『コト…………カチャ…………』

「ケーキ、どれくらい食べれる?』

「半分、いける?』

「ん、わかった……4分の1だな』

「ふふ……』

「誕生日を、こうやって、二人でお祝いできるってのは……いいものだな』

「あ…』

「アンタの誕生日なのに、私に逆サプライズしてくれただろ?』

「嬉しかったよ』

「ありがとう』

「ん?』

「ラブレターだよ』

「くれただろ?』

「また、付き合ったときと同じ方法で渡してくれるなんて……ロマンチックなんだな』

「ん? ズボンのポケットに入つてたぞ』

「そんなとこまで調べるの、私ぐらいのものだからな……』

「つまり、私へのプレゼントだろ』

「私には、わかってるから安心しろ」

「…………ん？」

「どうした？ 変な顔して……」

「あ…………わかった」

「私からのプレゼントだな？」

「大丈夫、用意してあるよ」

「ほら……」

『カサつ……』

「ふふ……」

「アンタが一番欲しいのは…………」

『カサつ……』

「これ…………」

「ん…………？」

「婚姻届けだぞ…………」

「今日でアンタ、○8だろ？」

「もう私は、○8だから…………」

「できるだろ？ 入籍…………」

「…………」

「何か問題……」

『かきかき、かきかき……』

「あら……」

「え？　いや……」

「アンタのことだから、こういうとき……ほら……」

「いつも……なんか話があるとかなんとか、言いだすだろ……？」

「だから……」

『かきかき、かきかき……』

『カタツ……』

『カサツ……』

「え？」

「あ……かけた？」

「うん……ありがと」

「え？　話はないけど……」

「セックスしたいの？」

「う、うん……」

「も、もちろんいいけど……」

「まだ昼だけど……」

「え？ 昼も夜もするの？」

「い、いや……もちろん、いいけど……」

「ス、スケベなんだな」

「いや、スケベはいいことだけれども……」「

『ガサガサ……ガサガサ……』

『ボスンっ』

「ぎゃっ」

「う……」

「ああ……」

「押し倒されてしまった……」

「このままでは、犯されてしまうぞ」

「んふふ……もちろん、望むところだ」

「このまま犯されて、種付けされてしまおうと思うぞ」

「ふふ……」

「んっ……」

『ちゅっ……ちゅぱっ……』

「……キス、上手になつたな……」

「本当に上手だ……」

「口の中に……幸せがいっぱいだ」

「ふふ……」

「来年も、一緒に、誕生日をお祝いできたらいいな」

「……」

「そ、そうだな……来年も、再来年も、ずっと、だな……」

「な、なんだか今日は、すごく積極的なんだな」

「いや……嬉しいぞ」

「うん……」

「大好きだぞ」

「ふふ……」

「本当に、幸せだな……」

「あ……♡」

「あんつ……♡」

「はんつ……あつ……はつ……あ、あつ……あつ……あつ……ああああああん♡」